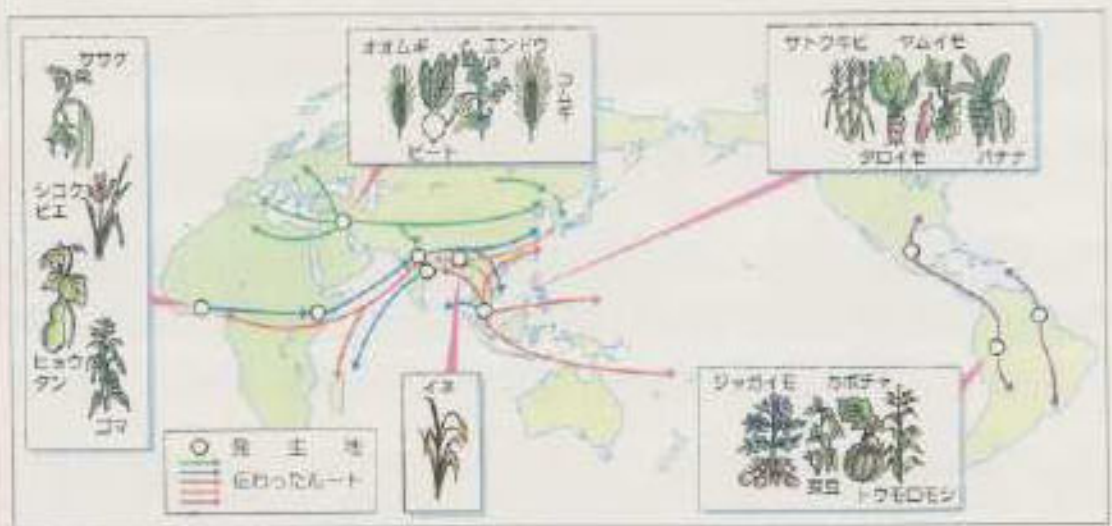


学習指導要領の内容の(2)ア「人類が出現し、やがて世界の古代文明が生れたこと」を理解させる」に示す内容を、学習指導要領に示していない内容として扱っており、不適切である。

発展的な学習 農耕型の社会と牧畜型の社会

わたしたちの食生活をみてみましょう。ずいぶん豊かになったことがわかります。スーパーマーケットには形のそろった野菜・果物や、新鮮な肉・魚などがたくさんならんでいます。日本国内はもちろん、世界各国のさまざまな食料を手に入れることができますし、いろいろな野菜や果物を1年じゅう季節に関係なく食べることができます。

気候が大きく変化したといわれる約1万年前は、どのような生活だったのでしょうか。



○農耕作物のおこりと広まり(中尾佐助氏作成の図より)

【気候の変化】

人間の歴史は、さかのぼればさかのぼるほど、気候や風土的な条件によって左右される度合いが大きくなります。

約1万年前に最後の氷期が終わり、人類の生活環境は大きく変わりました。気候が温暖になったことによって、それまで氷河におおわれていた地域は草原、そして森林へと変わり、北アフリカや西アジアでは地表の乾燥化がすすみました。人類の主要な食料源となっていたトナカイ・マンモスなどの寒系の動物は北へ移動するか絶滅し、かわって暖系の小動物(シカ・イノシシなど)や鳥類・魚介類が繁殖したのです。

人類は、弓矢を発明して敏捷な小動物を追い、矢・槍・鏑などの石器が多く用いられるようになりました。漁労もさかんになり、丸木舟や網を用いて魚をとり、貝も貴重な食料となりました。また野生であった犬が家畜として飼われはじめました。自然環境の変化に対応して新しい生活様式をつくりだしたのです。

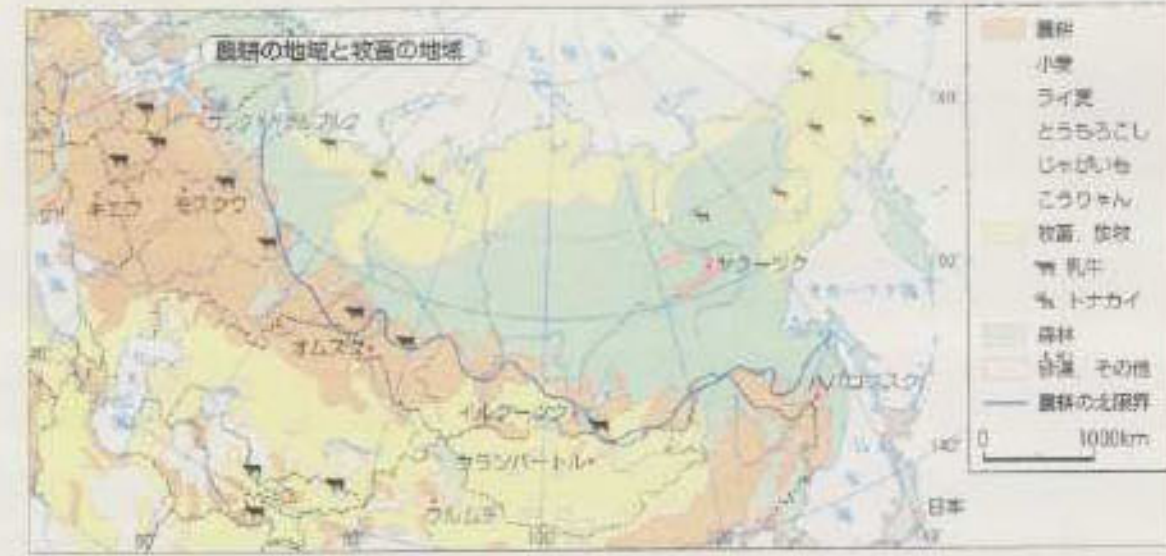
【農耕型の社会】

オリエントで発達した農耕文化はヨーロッパ・インド・中国とユーラシア大陸の諸地域に広がりました。

大河流域の農耕型社会は、豊かな収穫によって富を蓄積し、安定した経済を営むことができました。その国家は、衣食住を共にする集団で生活していたので、一般的には平和的でした。なので、その準備は攻撃的ではなく防衛的性格



○農耕・牧畜がはじまったころ



が強かったのです。

農耕生活は、一定の土地に定着し、毎年同じような生産活動をくり返すので、過去の経験を模範とし、伝統を尊重する生活態度が生まれました。

【遊牧型の社会】

中央アジアからアフリカにかけての草原・砂漠地域では遊牧が盛んに行われました。馬の家畜化がはじまり、馬上から弓を射る騎射戦術をとり、世界的に征服・移動をくりひろげました。彼らを遊牧騎馬民族といいますが、強い弓矢などをそなえる草原の騎兵は、15世紀に火器が登場するまで戦場で猛威をふるい、大帝国をつくったのです。遊牧生活は、気候条件に大きく左右され



○遊牧(モンゴル高原)

るので、あるときは農業地やオアシスの安住民と平和的な交易、あるときは侵入と略奪によって生活を営んでいました。動物こそは衣食住の貴重な資源なので、基本財産である馬や羊を養うために、組立て式のテント(パオ=包)をもって夏営地と冬営地のあいだを定期的に移動しながら、家族集団での共同生活をおこないました。

彼らはきびしい自然条件のもとで、牧草地を求めて移動する生活なので、過去の経験よりも、個人の能力が尊重され、積極的に冒険心に富む英雄的な指導者が求められました。遊牧民の移動性によって、文化や財貨の交流に大きく貢献することになったのです。



○小麦のとり入れ(フランス)

もっと知りたい 農耕型の社会と遊牧型の社会

わたしたちの食生活をみてみましょう。ずいぶん豊かになったことがわかります。スーパーマーケットには形のそろった野菜・果物や、新鮮な肉・魚などがたくさんならんでいます。日本国内はもちろん、世界各国のさまざまな食料を手に入れることができますし、いろいろな野菜や果物を1年じゅう季節に関係なく食べることができます。

気候が大きく変化したといわれる約1万年前は、どのような生活だったのでしょうか。



○農耕作物のおこりと広まり(中尾佐助氏作成の図より)

【気候の変化】

人間の歴史は、さかのぼればさかのぼるほど、気候や風土的な条件によって左右される度合いが大きくなります。

約1万年前に最後の氷期が終わり、人類の生活環境は大きく変わりました。気候が温暖になったことによって、それまで氷河におおわれていた地域は草原、そして森林へと変わり、北アフリカや西アジアでは地表の乾燥化がすすみました。人類の主要な食料源となっていたトナカイ・マンモスなどの寒系の動物は北へ移動するか絶滅し、かわって暖系の小動物(シカ・イノシシなど)や鳥類・魚介類が繁殖したのです。

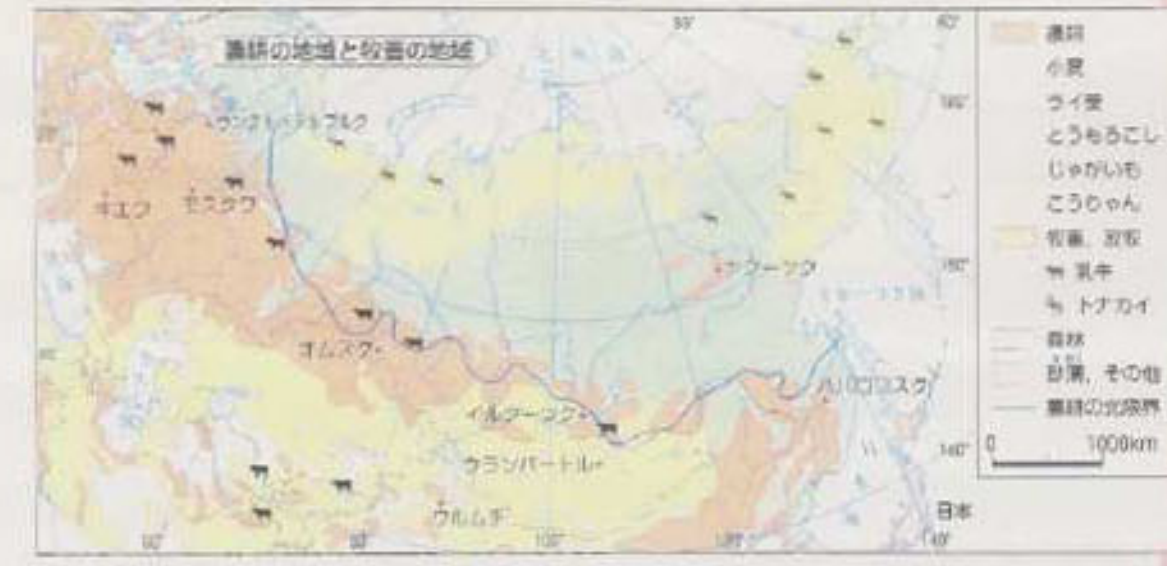
人類は、弓矢を発明して敏捷な小動物を追い、矢・槍・鏑などの武器が多く用いられるようになりました。漁労もさかんになり、丸木舟や網を用いて魚をとり、貝も貴重な食料となりました。また野生であった犬が家畜として飼われはじめました。自然環境の変化に対応して新しい生活様式をつくりだしたのです。

【農耕型の社会】

農耕は、チグリス川・ユーフラテス川の流れるメソポタミアから、ナイル川の流れるエジプトにかけてさかんになりました。この地域は、のちにローマ人によって、オリエント(日のぼる地方)とよばれました。川は氾濫して、人々の暮らしをおびやかしましたが、同時に、上流の肥えた土を平野に残してくれました。農耕が進歩するにしたがって、人口も増え、



○農耕・牧畜がはじまったころ



また、灌漑や治水の工事を指図する指導者が現れました。やがて身分の差が生まれ、社会のさまりや仕組みもできて、国家が誕生しました。農耕生活は、一定の土地で、毎年同じような生産活動をくり返すので、過去の経験を模範とし、伝統を尊重する生活態度が生まれました。

【遊牧型の社会】

中央アジアからアフリカにかけての草原・砂漠地域では遊牧が盛んに行われました。馬の家畜化がはじまり、馬上から弓を射る騎射戦術をとり、世界的に征服・移動をくりひろげました。彼らを遊牧騎馬民族といいますが、強い弓矢などをそなえる草原の騎兵は、15世紀に火器が登場するまで戦場で猛威をふるい、大帝国をつくったのです。遊牧生活は、気候条件に大きく左右され

るので、あるときは農業地やオアシスの安住民と平和的な交易、あるときは侵入と略奪によって生活を営んでいました。動物こそは衣食住の貴重な資源なので、基本財産である馬や羊を養うために、組立て式のテント(パオ=包)をもって夏営地と冬営地のあいだを定期的に移動しながら、家族集団での共同生活をおこないました。

彼らはきびしい自然条件のもとで、牧草地を求めて移動する生活なので、過去の経験よりも、個人の能力が尊重され、積極的に冒険心に富む英雄的な指導者が求められました。遊牧民の移動性は、文化や財貨の交流に大きく貢献することになったのです。



○小麦のとり入れ(フランス)



○遊牧(モンゴル高原)